
AMC石投事務所

天草暦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A M C 石投事務所

【Nコード】

N 3 8 7 6 T

【作者名】

天草暦

【あらすじ】

日比野千種は就職活動まっただ中の22歳。落ちに落ちまくっているところに、とある求人を見つける。

無条件で好条件なその会社に、早速電話をかけた千種だったが・・・。

出会い その1

もう後がない。

これで一体何社目だ、と俺は静かに溜息をついた。

ひびのちくせ
日比野千種 22歳、現在就職活動中である。

いよいよ大学4年生となったこの春、1番にする事は仕事探しだった。

夢がない、と言われればその通りだ。俺自身もそう思っている。

だが実際に4年生なんて単位さえ取っておけば特別にする授業なんてない。（頭がいい学部は別だが）

卒業後の進路を探す以外、やることはないのだ。

そして「さあ将来の勤め先でも探しますか」と意気込んだまでは良かった。

遅かったのだ。

元々大学に行くのに大した目的もなかったし、てきとーに勉強していいところに就職できればそれで人生万々歳だろーとか考えていた。

しかし、現実には甘くない。

俺がぼーっと単位を取るためだけに授業を受けている3年生の時に、ほとんどの人が就職活動をはじめていた。

そうになると、4年生から就職活動している俺はなかなかにあぶれるわけ。

就職氷河期時代と言われている昨今、適当な気持ちで面接を受けている俺が当然受かることもなく。

友人にも実際に就職が決まったやつなど指で数えるほどしかない。そこでようやく俺はこの状況はかなりまずいと、理解したのだった。

「えーと……これで17社アウト、か。」

7月、うだるような暑さに耐えきれず、近くのアーストフード店に逃げ込んだ。

アイスコーヒーを注文し、笑顔で渡してくれたおばちゃんにお礼をいって一人掛けソファに座りこんだ。

からからに乾いた喉におもいきりアイスコーヒーを流し込む。うん、うまい。

そして鞆から求人票や、アルバイト雑誌を取り出して目を通す。

17社。俺が落ちた会社の数だ。

これでもまだ少ない方だと友人は言う。

確かにテレビとかで100社受けましたーとか言ってるOLさんとかいるしな。

しかし、17社でもやはり心にずしんと重いものがある。

特に目立った特技や資格もないので、ひとまず事務か営業の仕事を探しているわけだが。

当然そんな奴が採用な訳ない。受かるのは資格かスキルがすごい奴だけだ。

けどここまで不採用不採用言われるのは、正直かなりへこむ。

まるでお前は这个世界に必要ないって、言われているみたいだ。

「……なんて、かつこつけてみたり。」

そりやあたり前だ。履歴書の資格欄に何も書けない俺の方がおかしいのだ。

こんなとき思う、必死に資格とつときゃよかったなあと。

・・・と、いまさら悩んでもしょうがない。次に受ける会社を探そう。

ばらばらばらめくつていくと、とある求人に目が止まった。

「ん？正社員、給料30万以上、未経験可、資格不可・・・ってマジか!？」

アルバイト情報誌にもたまにだが正社員の情報が載っている。

が、ほとんどは資格を必要としていたり、俺にできないような仕事ばかりだった。

未経験可、資格不可という言葉が、どれだけ嬉しいか！

早速その求人の情報を読んだ。

正社員：事務

月給30万円程。未経験者可、資格不可、学歴不可。

時間：9：00～18：00 休憩あり

休日：週休2日制 大型連休あり、有給あり。

応募：気軽にお電話下さい。↓0401*****

一言：やる気ある人歓迎、強い人歓迎。

えーえむしーしゃくなげむしよ
AMC石投事務所

「・・・・・・・・・・」

読んで驚いた。なんだこの好条件のいい会社は。

一言の「強い人」にはなんだかひっかかるが、まあよしとしよう。

とにかく行動、善は急げだ。スーツの胸ポケットから携帯を取り出した。

求人に記載している電話番号を押し、一呼吸してから通話ボタンを押した。

心臓が激しく音を立てている。なんだかいつも以上に緊張する。

唯一つ心配なのは、他の誰かが既に電話をしていることだ。

先に電話して、そっちが採用されていたりでもしたら俺は何の意味もなくなる。

頼む、あんまり願ったことない神様、本当に頼みます。

しばらく呼び出し音になっていたが、俺の祈りが通じたのか。
がちゅ、と出る音がした。

「っもしもし！」

「はい、こちらは、AMC石投事務所です、ございます。」

出会い その2

「はい、こちらは、AMC石投事務所で、ございます。」

機械的な女性の声だった。しかも途切れ途切れになっっていて音が悪い。

機械、ということは留守番電話か。ちら、と腕時計をみると午後4時。

だが今日は平日だし、まだ会社は終わる時間じゃない。

どこかに出かけているのだろうか、と考えていた時だった。

「面接を希望、される方は、1を、そうで、ない方は2を、押してください。」

・・・・・・。

思考回路が若干止まった。

この音声アナウンスは、よく宅配便が留守でメモがポストに入っていて、連絡するとこんな感じな音声だったよなあ。

ん、あれ、なんだこれは。

混乱している俺を引き戻すかの様に、もう一度同じ声が聞こえる。

「面接を希望、される方は、1を、そうで、ない方は2を、押してください。」

は、と意識を現実へと戻し、俺は恐る恐る携帯の1ボタンをゆっくり押した。

とりあえず、やってみるしかない。

「承りま、した。それでは、次に、男の方は1、を、女の方、は2を、押してください。」

1。

「承りまし、した。次に20歳以、上は1を、20、歳以下は2を押して、ください。」

1。

「承り、まし、た。次に格闘技、をやつて、いた方は1を、やつていない方は2を、押してください。」

1。ちなみに、合気道を高校・大学と部活でやっていた。（そんなに強くないけど）

「承りまし、た。それでは、最後に。」

「やる気があるなら1を押して、ないならこのまま切りやがれ。」

突如声が変わった。

それまで機械的だったのが、急に人間味のある声に。少女のような、少年のような、中性的な、綺麗な声。しかし言葉遣いは酷いな、やがれて。勿論、押すボタンは決まっている。

1。

「……求人に載っている住所に明日朝10時。スーツで来てよんじゃ。」

ぶつ、と切れた。

「……正直色々と言いたことがあるが、まあやめておこう。そんなことよりも俺は、かなり浮かれていた。

好条件なこの求人、逃してなるものか！

明日の面接はいつも以上に気合を入れて臨もう。

そうと決まれば、やることは決まっている。

俺は残っていたアイスコーヒーを一気に飲み干し、ゴミ箱にいれてその場を後にした。

家に帰ってやることは、新しい履歴書を書いて、面接の練習をして、スーツと靴を磨いておくことだ。

次の日、俺は携帯のアラームで目が覚めた。

時間は朝の8時。俺の家から会社までは30分もあればいける。

顔を洗い、髪形を整え、朝ごはんをしっかりと食べて、昨日準備しておいたスーツに袖を通す。

ネクタイをしっかり結び、もう一度鏡で確認。よし、身だしなみ完璧。

玄関でぴかぴかに磨いた靴を履き、後ろから「しっかりと着きなさいよ！」と母親の声を背中を受け止め、一歩踏み出した。

求人に乗っていた住所は、うちの母親もよく利用する商店街の端っこの方にあるビルだった。

見かけは、まあ、すこし古い。2階建てで、1階は「テナント募集」になっていた。

横にある階段を上り、事務所のドアの前に立つ。

腕時計を見ると、9時45分。ちょうどいい時間だ。

深呼吸を繰り返し、さあ行くぞ！とドアにノックしようとした。その時だった。

「君がうちの求人見て来てくれた子だ。」

後ろからあの電話と同じ声がした。

ノックしようとした手をひっこめ、すぐに後ろを振り向く。そこには、

「はろーい、初めましてー。」

ひらひらと軽く手を振りながら、その少女は言った。

少女だった。

男物の黒いロングコートをはおってはいるが、その顔だけは明らかに女性だ。（しかも結構な童顔）

その外見はまだ16、7くらいの高校生に見える。

長く黒いぼさぼさの髪が風になびいているのを、その少女はうつとうしそうにしていた。

しかし、今は7月だ。この子の着ているロングコートは冬物だし、おまけにファーまでついてる。

しかも袖はぶかぶかで全体的にコートに着られている感じが。
・・・と、そこで視線は足元の方へと動いた。

素足だ。生足だった。コートから見えるは白く細長い生足。しかも裸足。

まさかとは思うが、そのコートの下は・・・。

「ああ、中はキャミと短パンはいてるよ。がっかりした?」

俺の考えが読めたのか、心の声が漏れたのか、少女は俺の疑問にすぐに答えてくれた。

そうか、よかった着ていたか……。がっかりというよりは、安心した。

さらに、俺にはもう一つ疑問が残る。

この少女は何だ?

会社の人にしては若すぎるし、娘さんってところなのか?

「それよりも、初めましてって言ったんだから、はじめましてしてよね。」

ぶう、とほっぺたを膨らませながら少女はそう言った。

おっといかんいかん。どちらにしろ少女はこの会社に関係があるんだ。

こんなところで失態なんて見せられない!

・・・しかしこの拗ねた表情は明らかに子供にしか見えない。

「失礼しました!初めまして、本日御社に面接を受けに参りました、日比野千種と申します。よろしくお願い致します!」

60度、頭を下げた。多分今まで受けた面接で一番いい挨拶ができたと思う。

しばらくして顔をあげると、視界に入っただのはぼかんとしている少女の顔だった。

「ふあー真面目だねえ。うん、すごいよ君。真面目ボーイだ。」

「・・・あ、ありがとうございます？」

「ま、とりあえず事務所入ろうよ。他の皆にも紹介するし。」

「はい！って、他の皆・・・？」

それはやはり社長とか会社の人なのだろうか。

やっぱりこの少女は社長の娘さんか。

すると少女はドアを開けようと俺の前に立っていたのだが。

振り返り、にこりと天使のような笑顔で笑いながらこう言った。

「AMC石投事務所所長、しゃくなげめい石投命、だよー。いっちばん偉い人ー。」

多分その時俺の時間は少し止まっていたような気がした。

あれ、これ、夢か？

出会い その2の2

自分の身にどうしようもない出来事が起きて、「あれ？これは夢だろうか？」と思ったとき。

よく昔から頬をつねってみて痛かったら現実、痛くなかったら夢の中だと両親やら先生やらに教わった気がする。

そして現在、普通に痛い。

どうやら夢ではないらしい。

「なにぼーつとしてんの。あと3秒で扉しめるぞ。」

つねって現実に戻ってきた俺は、その言葉に今が絶賛就職活動中のまっただ中であることを思い出した。

「あ、は、入ります！」

そうして俺は、この事務所に文字通り足を踏み入れてしまったのだ。

「お帰きなさいませ、所長。」

扉を開けるとそこには執事がいた。

所長と呼ばれた少女、石投命はそれがいつもの日常風景で慣れているのか普通に「たっだいまー」とその執事に返事をする。

俺は考えた。現在は2011年だ。そしてここは日本である。でいいすいずじやばん。

例え執事がいるとしても、それはどこかの大金持ちの家くらいだろう。

それが何故か、事務所の中にいる。言い方は悪いが結構ぼろい事務所にだ。

そんな固まっている俺を無視して二人は会話を続けていく。

「この人がね、昨日電話してきた日比野千種くん。真面目ボーイだよ。」

「嗚呼、彼がですか。本当だったんですね、所長が言っていたことは。」

「僕が嘘つくわけないじゃんよー。」

「それもそうでしたね、失礼致しました。」

執事は会話を切り上げえると、俺の方に歩み寄ってくる。

そしてすつと綺麗に頭を下げた。おお、俺が面接でするお辞儀よりもなんだか上品だ。

「初めまして、日比野千種さん。俺はこの事務所の副所長を務めさせていただいておりますむしたぬきやういん綿貫隼と申します。以後、よろしくお願い致します。」

「あ、どうも・・・ってえと、俺、あ、いや私は日比野千種と申します！こちらこそよろしくお願い致します！」

「そんなに固くならずともいいですよ、俺のこれは趣味のようなものですから。貴方は普段通りにしてして下さい。俺の事は気軽に隼とお呼び下さい。」

にこり、と綿貫隼さんは上品な笑顔で言った。

改めて見ると、かなりのイケメンだった。

執事の制服（燕尾服、だっけか）をさらりと着こなし、長い手足に背も175ある俺よりも更に高い。

おまけに顔もかっこよくて、プラス眼鏡。そして声もいい。完璧とはまさにこの人のことだと思う。

「さあ、こちらへどうぞおかけ下さい。今お茶を持ってきてもらいますので。」

「あ、はい。」

隼さんに案内され、所長の机の前にある椅子に座る。

周りを見てみると、至って普通の事務所だ。

広さは学校の教室くらいで、壁には本棚やら棚、真ん中には長テーブルが2つ。

そして俺の目の前には所長が一人で使っているデスクと、更に所長の横の方には部屋がもう一つある。

しゅうしゅうとやかんの音が聞こえるということは、おそらくは給湯室なのだろう。

簡単に言ってしまうえば某団長の部室とか某名探偵の事務所と似ている。（これでわかるのかも微妙だが）

と、その時がちゃ、と扉が開く音が聞こえた。

音のする方を見て、俺はまた思考回路が止まることになってしまった。

大男だった。

俺と隼さんを並べても隠れるんじゃないかという巨体。

オールバックでサングラス。体もごつく、着ているスーツの下からでもそのごつさがわかるくらいだ。

俺は思った。普通に怖すぎるこの人。

その人はゆっくり歩いてくると俺と所長の目の前に先ほど沸かしていたお湯でいれたであろう、紅茶の入ったティーカップをことんと置いてくれた。

ものすごくいい香りだ。紅茶は飲んだことはあるが、ここまで香りがいいものは飲んだことがない。

大男はそれを置くと自分のデスクに向かい、静かに腰かけた。
・・・なんだかちょっと拍子抜けだが、まあ何事もなく良かった。

「うん、やっぱ一里の紅茶がいちばんだね。君も飲んで飲んで。」
「は、はい、いただきます。」

所長に促されティーカップに口付けた。
香りもいいが、味も良かった。こんなうまい紅茶がこの世にあるなんて、驚きだ。

「彼はねえ、東条一里^{とうじょういちり}。彼の淹れる紅茶とかコーヒーは世界一美味しいんだよ。料理も上手だし。」
「はい、すごいうまいですー!」

「だって一里！よかったねえ。」

一里さんは座りながらす、つと頭を下げた。あまりしゃべらない人なんだな。

しかし、あの巨体で料理とは……世の中にはいろんな人間がいるな。

「さてと、そろそろ話しょーか、きみ。」

「あ、はい！あの、履歴書を……。」

「必要ないよそんなの。」

「はい？」

「だって君もう採用だもの。今この時社員になりましたーおめでつとーござーますーいいい！」

俺はもう一度自分の頬をつねってみた。
痛かった。

出会い その2の2（後書き）

おそらく次の話で彼らの仕事がかかります。

出会い その3

「ん？なんで俺が即採用なのかって？あっははー教えてあげるよ。」

「求人雑誌とかってさ、かなりの部数があるよね。正確に数えてはいないけど数十万部はあるのかな？まあそんなことはどうでもいいけど。」

「その数十万部の中に一冊だけ、君が見た求人誌にだけ、僕の事務所の人を載つけたわけ。おそらく何万分、いや何十億分？の確率で、君はそれを引き当てた。」

「運がいい、てことになるのかそれとも、偶然ではないのか。」

「元々ねーうちは3人でやってるんだけど、書類まとめるの皆嫌がるんだよねー。まあ面倒くさいし、パソコンさんでかちゃかちゃ打つの。そこで、書類まとめとか、そうゆうことをやってくれる人を募集してみる？ってことになったの。」

「でもただ募集するだけなんておもしろくないでしょ？だからそうやって一冊だけに見てみたの。ああ、これは僕の数少ない友人にやつてもらったんだ。なかなかすごい子でしょ。」

「とまあそんな感じで、君が来た。あの電話考えたのも僕だよー。最後まで電話を切らないでちゃんとしてくれてありがとう。あれ途中で切ってたなら二度と繋がらない設定になってたんだよ。さすが真面目ばーい！」

「以上。ご質問ありあり？なしなし？」

所長はそこまで話すと、話過ぎて喉が渴いたのか残っていた紅茶を一気に飲み干した。

俺は冷めた紅茶が入っているティーカップを見ながら、思考回路をフル回転で働かせる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・うんまとめると俺は運が良かったことになる、ってことだ。・・・・そうとしか言えない、というか、もうよくわからない。

「・・・・・・・・では、質問いいですか。」

「どぞどぞ。」

あれ、これは普通の面接とは逆の立場な気がするのだが。

「とりあえず、ここは何の会社なんですか？」

「あ、そこなんだ。うんとねー。簡単に言ってしまうえば、『何でも屋』って感じ？」

「何でも屋・・・・？」

「うん、AMCっていうのはね。」

オール ミッション
ALL MISSION COMPLETE

「・・・・っていう意味なわけだよ。」

そのままだったのかよ。

「すべての、任務を、成功させよ。つまり何でも屋。つまりはAM

「つまりは便利屋。」

「いっこ増えましたけど。」

「つまりは雑用？」

「パシリってことじゃないですか!!」

「そーともいうー。でも、毎日毎日大忙しなんだよこれでも。ここは商店街の中にあるからね、常に依頼は絶えないわけですよ。」

俺は心の中で思いつき溜息をついた。

なんでだ、大学出て就職できた先がパシリって。パシリって!

商店街の中の依頼なんて、所詮電球変えてくれ、だの野菜を運ぶのを手伝え、だのそんなくらいだろう。

そうだ、今からでも遅くない。「やっぱり辞めます」って言えばいいんだ。

もつと頑張れば、ちゃんとした会社に就職できるかもしれない。

ここまで条件のいい会社は多分ないだろうが、ハローワークならなんなり行けば、なにかあるだろう。

そうだ、そうしよう。うんやっぱパシリは嫌だ。

「基本は土日祝休み。たまに出てって時もあるけど。お給料は依頼が月に一件も無くてもちゃあんと払うよ。30万くらいでいいよね?保険とか差し引くから20何万になるけれど。」

「ええと、あの。」

「・・・とりあえず、言いたいことは依頼が一件終わってからもいい?」

「はい?」

「ここは、ただの変わった事務所じゃないよ。パシリって訳じゃない。なかなかこんな体験できないから、1週間くらい仮就職してみない?勿論、その1週間分のお給料はあげるし。ね、やろうよ。」

1週間。7日。お給料、もらえる。
……前言撤回だ。

「じゃあ、お願い、します。1週間、よろしくお願いします。」
「決まりだね。」

にい、とすごく嬉しそうな顔で所長は言った。
我ながら金に目がくらんだのは情けないと思う。

でも確かに、この事務所の面子を見るとなかなか体験できないようなことが起こりそうだ。

まあ、いい人ばかりっぽいし、それになにより、ちょっと面白そう
うだ。

「では改めて。僕は所長の石投命。尊敬の気持ちをつつぷりとこめて所長と呼び給え。」

「副所長の綿貫隼です。よろしくお願い致します。」

「こっちは東条一里ね。ちなみに副所長補佐。31歳独身よろしくね！」

「……………」

「で、君は副所長補佐の補佐。これからよろしくね、千種。」

こうして俺はこの変わった3人と一緒に働くことになった。
うん、楽しくなりそうな予感がした。

そしてその予感は当たらずとも遠からずで。

やっぱ仮就職すらもやめときゃよかったと思う日が37回くるとは

思
わ
な
か
っ
た。

依頼 その1

この事務所に入って今日で4日目。
とりあえず今のところ大きな事件も無く、平和な日々を過ごしている。

（昨日までの3日間であった依頼は引越しの手伝い、仕入れの交渉、電球の取り換え、ペットの散歩など、雑用としか言えないような依頼ばかりだった。）

今現在、俺は昨日依頼された工藤さん（79歳）の家の家事手伝いの報告書を打ち込んでいる。

報告書といっても何をやったかとか、日付とか、そんなくらいで、学生時代によく書いていた学級日誌みたいな感じだ。

そして今日を含め4日目、俺はなんとなくだが周りの3人について少しずつ分かりだしてきた。

まず所長こと、石投命さん。女。年は秘密だそうで。（正直15歳くらいにしか見えない。）

一人称は「僕」。この事務所の所長。・・・のだが普段は椅子に座って紅茶を飲んでるか、本を読んでるか、パソコンいじっているか、いないかだ。よくどこかに出かけている。が、どこに行ってるのかは知らない。常にファーつきのだぼだぼの男物コートを羽織り（ちなみに今は7月なのだが暑くないのだろうか）、髪はいつもぼさぼさ。たまに東条さんが整えてあげている。かなりの甘党。コーヒーに砂糖を6杯いれる。

次に副所長の綿貫隼さん。男。183センチ。25歳。

一人称は「俺」。常に燕尾服を着ている。眼鏡。顔良し、スタイル良し、頭良し、な完璧な人。

なのだが、かなりの不器用らしい。（針に糸が通せないと言っていた。）

入って2日目になぜ執事の格好をしてるんですか、と質問したら。

「嗚呼、これはアニメ『執事でごめんっ』に出てくる煌讓きりやうというキャラクターのコスプレなんです。俺はあのアニメを見てものすごくはまってしまってますね。しゃべり方や格好、全てを真似したんです。所長にも似合っていると言われたので、ずっとこの格好をしているんです。貴方もご覧になったことはありますか？なにせ監督があの特徴的な神アニメ『まじかる わわわワンダーランド』を手掛けた堤下監督でしょ。よろしければ私はブルーレイBOXを持っているのでお貸ししますよ？貴方も絶対にはまると思うのですが。」

と返ってきた。かなりのオタク。（ちなみに俺はその申し出を却下しました）

そして、東条一里さん。男。身長193センチ。31歳。独身。一人称は声を聞いたことがないのでわからない。無口。常にオールバックで、サングラスをしている。

スーツ姿ばかり。超器用。綿貫さんとは正反対だ。

紅茶やコーヒーを淹れるのが得意で、料理も得意。プロ並みに旨かった。

今のところ分かっているのはこれだけだ。これだけでもかなりの個性的な人達だと思う。

なんか俺、かなり平凡なんだと思う。むしろ平凡で良かったと、心から思った。

そんなことを考えながら、報告書の入力を終わらせた。誤字脱字がないか確認をしてから、コピーをする。

そのコピーした書類を所長の机の上に置いて、席に戻る。これで俺の仕事は一先ず片付いた。

そのタイミングを見計らったかのように、東条さんが机にコーヒーを置いてくれた。

「あ、ありがとうございます。」

「……………」

そのまま東条さんは自分の席に戻って、自分の分のコーヒーを飲んでいた。

ちなみに、綿貫さんは自分の席でヘッドホンして音楽を聴いてて、所長は留守である。

この職場は自分の仕事が終わると、基本自由だ。何してても構わない。

（さてどうしようかなーなにするかなー。昨日の読みかけの小説でも読むかな……………」

と、鞆に入っている読みかけの推理小説を取り出そうとした時だった。

「たっだいまあ！依頼人連れてきたよー！」

ばあん、とでかい音を立てて開いた扉の向こうには、元気いっぱい
の所長の姿と、もう一人。

俺は取り出そうとした手を引っ込めて、その依頼人の姿を見る。

所長に手をひかれ連れられたその人は、綺麗な女性だった。

「彼女はね、数入^{かずいり}サナちゃん。20歳。美人さんだよー。」

「し、石投さん。美人だなんてそんな……！」

「だってほんとのことだもの。」

「あ、ありがとうございます……。」

所長の机の前にある椅子に座る（俺が面接のときに座っていたところと同じだ）その女性、数入サナは、確かに美人だった。

清楚な格好、清楚な雰囲気、身につけているものを見ると、おそらくお金持ちのお嬢様だろう。

20歳ということは俺よりも年下なのだが、とても落ち着いている。とゆうか、落ち着いているというよりは、なんだか……。

「それでー、なにかな？サナちゃんの依頼って。」

「あ、あの……。」

「猫を、探し出してほしいんです。」

依頼 その2

「猫お？」

「はい、黒猫で、クロエって名前です。私の大事なペットなんですけど・・・一昨日、散歩に行ってしまったきり帰ってこなくて・・・」

「心当たりのある場所は探したの？」

「勿論、全て探しまわったのですが・・・。保健所にも行ってみたんですけど、猫は運ばれてきていないと。」

ふむふむ、と所長が頷いている横で俺は依頼書を打ち込んでいた。報告書は自分のパソコンで作成するが、依頼書だけは所長の持っているパソコンで打ち込まなければいけない決まりなのだ。

理由は「なんとなく自分の傍で依頼書作ってた方が安心する」だそうで。

「えっと、その猫の特徴とかがってありますかね？」

「ええ、緑色の石をつけた首輪をしています。」

「緑色の石の首輪と・・・。所長、こんな感じでいいですか。」

依頼人：数入サナ（20歳） 白亜大学3年生

家族構成：父・母・妹 父は不動産会社を経営、母親はデザイナー

依頼：ペット探し 黒猫、名前はクロエ 首には緑色の石の首輪

「ん、いいよ。んじゃ、見つかったらすぐ連絡するね。」

「はい・・・。お、お願いします！絶対に、絶対にあの子を見つけてください！」

目にたつぷりの涙を浮かべながら、彼女はそのまま「授業に行かない」とこの場を後にした。

しかし、あんなに心配するくらいなら散歩になんか行かせなければいいのに。

ずっと家に閉じ込めておけばいいものを・・・と思ったが口には絶対に出さない。

出したら彼女の涙が目から零れ落ちるのはわかりきっていることだ。

「んじゃ、みんなお仕事だよ。黒猫探し、はじめよつか。一里、隼は聞き込みと散策ね。」

「仰せのままに。」

「・・・・・・（こく）」

「あの、俺は・・・・・・？」

「千種は僕と一緒にここへ行くか。」

「行くって・・・・・・探しにですよね？」

「んーん違うよ。まあついてこればわかるから。」

さ、行くよと出ていく所長を慌てて追いかける。

探しに行かないってどうゆうことだ？

「・・・・・・てゆうか、所長暑くないんですか？」

「千種って反射神経いい方？」

何事もなかったかのようにスルーされた。

「そ、そうですね・・・・・・まあまあ方かと。」

「うん、ならいいか。」

たぶん死なないよね、とぼそつと所長が呟いたのを俺は聞き逃しは

しなかった。

え、死なないってなんだ。

その前に反射神経についての質問もなんだ。

俺の背中に夏の暑さとは違う別の汗が流れる。

「所長、今から一体どこに・・・？」

「ん？今から？」

「情報屋さんに挨拶ぶちかましにいつてあげるんだよ。」

依頼 その3

「ついたー！」

所長に連れられ着いた場所は、事務所から車で20分くらいの所だった。

（どうやって行くのかと思ったら、八百屋のおじさんに軽トラで送ってもらった。荷台に乗ったのは初体験だ。所長は助手席。）

そして「また今度も手伝いよろしく頼むよ！」と言い残して、俺達を残し軽トラは走り去って行った。

あれ、これは帰りは自力で帰ってこいということなのかな。

「どしたの千種、ぼーっとなって。」

「ああ、いや、なんかもう、何でもいいです。それより、本当にここに情報屋がいるんですか？」

建物の前に降ろされた時、俺は思わず二度見どころか三度見してしまった。

何故なら目の前に映ったのは、築何十年というかなりの年季が入った木造建築のボロアパートだったからだ。

窓ガラスは所々割れており、壁の板は所々外れている。

震度1でも揺すったら崩れるんじゃないかというおんぼろだった。

「そーだよ。さ、いきましょー。」

俺の考えもむなしく、所長はがんがん先へと進んでいく。

はあ、と小さな溜息を心の中でつき、俺もそのあとを追った。

しかし、事務所の3人といい、このアパートといい。

ここ最近かなりの変わり種に出会いまくっている。
願わくば、情報屋とやらが多少まともな人間でありますように・・・。

「えっと、103号室・・・ここだ。千種、準備いい?」

「はい、・・・ってなんの準備?」

「心の準備と反射神経の準備だよ。んでわ、あけまーす。」

ぎぎぎ、と古臭い音を立てて「103号室 P」というプレートがある扉が開けられた。

その瞬間。

目の前に何かが飛んできた。

何かとしか言えないのはそれはあまりにも早すぎて。

俺の顔面にクリーンヒットしたからだ。

ぼふ、っと目の前で音がして一瞬真っ暗になる。

慌てて目の前にある何かを手で引き剥がした。

ふわふわやわらか、ビーズクッションだった(某ねずみのキャラクターの)

「ほあー・・・よかったねえクッションで。」

「・・・全然よくないです。」

「前はねえ、やかんとか、リモコンとか、テレビとかだったんだよ。優しいのきてよかったねえ」

うふふーと所長は笑うが、それはヘタをすれば死んでしまうのではないだろうか。

てゆうかこの人、そんなん投げてこられて怪我ひとつしてないのか。それに、思っているよりクッションは痛かった。

「さてさて・・・おつ邪魔するよう、つつくん。」

俺の事はお構いなしに所長は部屋の中へと入っていった。

俺はとりあえず手に持っているクッションを一回叩いてから、一緒に中に入っていく。

見かけと同じく中も6畳くらいの小さな部屋だった。

おそらくトイレもお風呂もないであろう、ドアのそばに小さなシンクがあるだけだ。

けれどその部屋の内装は見かけとは全然違った。

部屋中にコードが張り巡らされていた。

部屋の中央には大きなパソコンと、その隣にも4、5台パソコンがある。

ゲームに出てくるような機械室とか、研究室みたいな感じだ。

そしてその大きなパソコンの前に、一つの影。

無造作にはねている短い黒髪。

茶色の甚平を身にまとっているその人は。

どうみたって所長と同じ位の年の少年だった。

少年はこちらをじーっと見て、小さな溜息を吐く。

そして開口一番。

「つつくんはやめろつつつてんだろーがこの馬鹿、殺すぞ。消すぞ。潰すぞ。てめーがそうやって呼ぶから他の奴らもそう呼んでくるじやねーか。てめえは一回死んで生き返ってまた死んで二度とこの世

に這い上がってくんじゃねえ。この屑野郎が。」

『願わくば、情報屋とやらが多少まともな人間でありますように・・・』

俺の願いはいつだって儚く砕け散ってしまうのだ。
この人、かなり口が悪い。

依頼 その4

「千種、紹介するね。こちらつくくんこと燕^{つばめ}君だよ。何でも知ってる情報屋さんだよ。」

「だからつくくん言うんじゃねえよこのタコ助。大体こんな得体の知れねえ奴俺のとこ連れてきてんじゃねえよ殺すぞ。」

「得体の知れないとは失礼な。こっちは日比野千種だよ。素敵で無敵な真面目ボーイさ！」

「その肩書きすら得体が知れねえっての。俺をなめてんのかてめえはいい加減にしとけよ阿保。」

「いい加減名前で呼んでくれたっていいのに」。僕が名前呼びを許すなんて、この世につくくん入れて3人しかいないんだから。光栄に思いたまえ。」

「殺すぞ、殺すだけじゃねえ殺して殺して殺すぞおい。」

すごく物騒な会話だが、お互い座って仲良く談笑って感じだからまあいいんだろう。

ちなみに俺は玄関前で正座させられている。入ろうとしたら包丁投げてきそうだったので、玄関でいいですかと質問したら投げてこなかったのでおそらくここが今俺が近寄れるベストポジションなんだろう。

多分対等的な立場になると所長のように隣で座れるんだろうな。俺は脚の痺れを感じつつも、目の前にいる人物に視線を向ける。

無造作にはねている短い黒髪。茶色の甚平を身にまとっている。

年齢は所長と同じ位、15、6だろう。とゆうか、こちらも童顔な気がする。

顔立ちはかっこいい。むしろ、かなりの美形だ。綿貫さんとい勝負。

綿貫さんが綺麗系の人なら、こちらは可愛い系の人だ。
ただし。

ぱつと燕さんと眼が合って、ぎろりと睨まれる。

「じろじろ見てんじゃねえよ。潰すぞ。」

「……………すいませ「しゃべんな。消すぞ。」

……………かなり口が悪い。

あんな顔立ちからは想像できないほどの罵詈雑言だ。

正直、かなり怖いです。

「……………で、今度はなんの用だ？」

「は、そうそうお仕事の依頼に来たんだった。いやーつくくんとし
やべつてると色々忘れちゃうねー」

「はん、ついにてめえの脳みそもイカレテきやがったな。よかった
なあ、おめでとう。」

「ありがとー。」

いや、そこは素直にお礼をいうところではないと思います。

と突っ込みたいところだが、如何せん俺はこの場所は発言権は無い。
所長は自分のコートのポケットに手をつっ込むと、何やら白いメモ
のようなものを取り出した。

「はい、これに詳しく書いてあるよー。」

「ああ……………」

「よろしくねー。お礼は今度渡すからー。」

「ああ……、てめえは、相変わらず訳わかんねえことに突っ込むな。」

「それはお互いさまーなのだよ。」

「ふん。これで用は済んだろ、とつと出てけ。消えろ。」

しっしっ、と犬を追い払うようなジェスチャーで所長は立ちあがった。

俺もそれに習い立ちあがる。じーんとかかなりの足の痺れが全身を伝った。

「帰ろっか、千種。これで今日の仕事は終了だから。事務所に着いたら帰っていいよ。」

「え、でも……。」

「つつくんにまかせておけばだいじょーぶ。明日にはわかつちやうよ。」

「はあ……。」

情報屋、から察すると猫がどこにいるかを沢山のネットワークを使って調べるのだろうか。

何がわかるのかはいまいちわからないが、とりあえず外に出た所長を追いかけようとした。

「おいそこのひのきの棒。」

ら、後ろから不名誉な名前で呼ばれ動きを止めた。

振り返ると、パソコンに向かいながらキーを打っている燕さんの姿。そのままの姿勢で、燕さんは会話を続けた。

「せめて、木偶の棒とかの方がまだ……。」

「五月蠅えよ。てめえが俺に意見すんな。焼くぞ。」

「……すいません……。」

「つたく、あいつも変なもん連れてきやがって……。てめえ、あいつの事務所入って何日目だ？」

「へ？あ、4日です。」

ぴたり、と忙しくキーボードを叩いていた燕さんの手が止まった。俺なんか変なこといった？

「4日、だと。」

「はい、今日を入れて4日目です。」

「……はあーん。成程な……。あいつがなあ、珍しい。まあなんか感じたんだろうが……。にしたってこんなひのきの棒にね……。ふーん……。は、面白え。」

「あ、の……。。」

「覚悟はあるか？」

まっすぐな目と視線が合う。

いつの間にこちらに向いたのだろうか、燕さんの体はパソコンではなく俺に向けられていた。

なんだろう、この質問は。

でも、俺に対して視線を合わせることもしなかった燕さんが、まっすぐに俺を見ている。

「っ覚悟は……。」

「……まあいい、もういい。出ていけ。」

なかなか答えが出せずにいると、諦めたのか燕さんは再びパソコンへと戻った。

何か言おうと思ったが、出ていけと言われた以上出ていくしかないのだろう。

俺も燕さんへと向けていた体をドアへと向けて、そのまま出て行った。

「お話終わった？」

外に出ると、座り込んで野良猫と戯れている所長の姿があった。（これまた似合うな）

「ええ、まあ。話といってもよくわからなかったですけど……。」
「そりゃそうだよ。つくんとわかりあう人なんてこの世界に存在しないよ。」

「所長は違うんですか？」

「僕らは仲良しだよ。【分かりあう】と【仲良し】は全然違うんだから。さ、帰ろ。」

「……そうですね。」

なんだか、いきなり疲れてしまった。早く帰って休みたい。

帰りも八百屋さんに送ってもらい、俺は鞆を持って事務所を後にした。

帰って風呂に入り、夕飯を食べ、すぐにベッドにダイブした。

ベッドで転がりながら、俺は今日燕さんに言われた言葉を思い出す。

『覚悟はあるか？』

「覚悟ねえ……」

正直、意味がわからなかった。

思い返すと、まるで漫画やアニメのワンシーンにありそうな台詞だな。

「……あーもう！考えるのめんどくせえ！」

こんな時は、さっさと寝るに限る！

そして俺は、複雑な気持ちのままで眠りに就いた。

翌朝。

母親が作ってくれた朝ごはんを食べながら、なんとなくテレビを見

ていた。

面白いニュースやってないかなーと思いながらチャンネルを変えていた、その時だった。

『昨夜未明、町の浜辺にて女性の遺体が発見されました。遺体は曳船数実さん、ひきふねかずみ24歳と見られ死因は焼死。現在警察が事件として調べています。』

それまではありきたりのニュースだった。だが、女性の写真が出た途端、思わず持っていた箸を落としてしまった。何故ならそれは。

『猫を探してほしいんです。』

と現れた、「数入サナ」さんの写真だったからだ。

決断

俺は朝飯を途中で食べるのを止め、荷物を持って家を飛び出した。後ろから母親が何か言っていたが、全く耳に入らなかった。

頭の中でさっきのニュースを思い出す。

『昨夜未明、町の浜辺にて女性の遺体が発見されました。遺体は曳船数実さん、24歳と見られ死因は焼死。現在警察が事件として調べています。』

あの写真は間違いない。俺は何度もあの人を見た。彼女は、数入サナさんだ。

と、事務所に向けて全力で走っている俺の頭に疑問が浮かぶ。

数入サナ、と彼女は名乗った。

しかし、ニュースで出た名前は曳船数実。全く違う。

頭がこんがらがってくる。そろそろ息が苦しくなってきたので、一度立ち止まった。

呼吸を整えながら、考える。

何故、彼女は嘘を吐いた？

何故、彼女は死んだ？

——だが、警察は事件として調べている。

まさか、殺された？だが、何の為に？

彼女は猫を探していただけだ。それも自分の飼い猫を。

途中、何かの事件にでも巻き込まれたのだろうか。

「・・・って、俺が考えてても埒が明かないよな。」

そう自嘲して、俺は目の前にある事務所を見上げる。

ここなら、多分何かを知っている。

そして、俺よりもっとちゃんとした考えも持っている。

知りたい。俺は、今何が起こっているのかを。

俺は2階へと、足を運んだ。

**

「そろそろかなあと、思ってたんだな」

にやにやと、楽しいような難しいような、そんな感じの笑顔で所長は俺を迎えてくれた。

事務所の中はクーラーでひんやりとしていて、走ってきて暑くなっ

た俺の体を冷ましてくれる。

席へ荷物を置くと、すぐに東条さんが冷たい麦茶を持ってきてくれた。

俺はお礼をいってからそれを一気に飲み干す。うん、だいぶ冷えた。

「あのニュース、みたんでしょ？」

「……はい。」

俺はグラスを席に置き、所長の机の前に向っていく。

「教えてください、何があったのか。」

「まるで僕が全て知っているみたいな言い方だね、それ。」

「知らないはず、ありませんから。」

「……千種。」

「覚悟はあるのかな？」

昨日と同じ、そっくりそのままの質問を投げかけられた。

「採用しておいてなんだけど、ここからはまあまあ危険な道に入っちゃうんだな。多分、非日常で、非現実で、非合理的な世界。もしも君がこちらへとくるのなら、僕は全部話してあげる。そしてこの事件と一緒に解決する。でもこないなら、今日でお別れ。君はこのまま帰って、全部忘れるんだよ。日常・現実・合理的な世界に帰るなさい。……さて、どうする？」

おそらく俺はかなりやばい所に足を突っ込んでいるのだろう。
多分漫画とかドラマによくある、裏の世界とかいうやつだ。

実を言くと、けっこうそんな感じの世界には憧れというものがあつた。

高校生の時、何にもやる気が起きなくて、それでも毎日が過ぎていく。日常しかなかった。

非日常は憧れた。空想の中では、俺はありとあらゆる人物になっていた。

だがそれは空想だから楽しいのであって、実際に非日常の世界になつたらきつと「やっぱり日常がいいよ!」となるんだろう。

裏の世界に、表は^{おれ}いらないのだ。

そう思っていたのに、今俺はその狭間にいる。

多分、とゆうか絶対、俺は今ここで引き返すべきなのだろうけれど。

「俺、知りたいんです。こちらとか、あちらとか関係なくて、何故彼女は、数人サナは嘘を吐いたのか。俺は、真実が知りたい。」

「……真実が君を殺してしまうかもしれないよう?」

「……殺されるのはちょっと、嫌ですが……。それでも!俺は、知りたいんです。」

「……」

「……えへへ。」

それは多分、本当の心からの笑顔だったのだと思う。
ふにやりと、優しく、年相応の笑顔で、所長は笑った。

「うん、僕の目に狂いはなかった。日比野千種、君は今から本採用だよ。立派なここの社員さん。」

「あ、ありがとうございます！」

「うふふ、まさかこんなに面白い子だとは思わなかったんだな。隼、一里。てな訳で彼は今日から僕らの仲間だよ。」

「嬉しいですね。これからよろしくお願い致しますね、千種さん。」

「・・・・・・。」

「は、はい。よろしくお願いします！」

どうやら俺の覚悟が認められたらしい。

俺はもう、おそらくは表には帰れないのかもしれない。

けれどやはり、俺は非日常に憧れていたのだ。

この事務所に入ってすぐ止めなかったのも、この3人が全くの常識外れだったからだ。

こんな人達、日常で会えることなんてない。

俺は、嬉しかったんだ。少しでも非日常に入れて。

なんでだろう、危険なこともあるんだろうけど。

それ以上に、すごく嬉しかった。

「さてさて、それでは本題に入りますか。みんな席についてください。・・・座った？では、本題に入りますよ。まずはこれをおいた方がいいのかもね。」

「この世界に数入サナなんて人間は存在しないってことを。」

捜査 その1

「存在しない？」

所長の言っている意味が俺には理解できなかった。

存在しない、ということは俺達が今まで話してきたあの人は、幽霊のような存在ということになる。

それはありえないだろう。俺はちゃんとあの人と会話したし、俺以外の3人もあの人の事は見えていた。

「そ、存在しないんだよ。数入サナはね。つくくに調べておいて貰って正解だったよ。なんとなく、嫌な予感がしてたもんだから。」

「調べておいてって……所長は、初めからわかっていたんですか？あの人が、その……。」

「僕の嫌な予感は当たるんだよ。嫌な特技だよ、全く。うん、わかってた。だから依頼を受けてすぐ、僕はつくくんをお願いしたんだよ。数入サナについて、色々ね。」

色々、と何かが含まれているような、そんな言い方だった。おそらく何かやばいことなのだろう。

それもそうだ、この事件は、何かが絡んでいる、そんな感じがした。

「それで、何が判ったのでしょうか？」

「まず一つ。この地球上に数入サナは存在しない。そんな名前の人には、何処にもいないってよ。つまりは、偽名ってこと。」

「だから、ニユースであの名前が流れたのか……。」

「正解だよ、千種。あの人が教えたのは全部嘘。名前も、経歴も、全てが嘘だ。白亜大学のデータベースにハックしてもそんな生徒は一人もいなかったって。これが本当の彼女の正体だよ。」

そう言つて所長は全員に数入サナの写真が入った一枚の紙、つまり、
本当の彼女を見せてくれた。

曳船数実 24歳 家族：姉1人 両親は行方不明
職業：大蔵株式会社社員 6年勤務

現在アパートで姉と二人で暮らしており、姉も同じ会社に勤務。
近所の評判は「優しい」「綺麗で素直」など外面は良い。

「大蔵株式会社・・・成程。そういう事でしたか。納得です。全
てが繋がりますね。」

「ふふ、隼はさすが、理解が早いねー。一里ももうわかるでしょ？」
「・・・・・・・・」

隼さんと一里さんはこの一枚ですぐに納得がいったのか、満足そう
な顔を浮かべている。

俺はというと、全く付いていけない。当たり前だ、俺はこちらに入
ったのはたった数分前だ。

唯一判るのは、多分この一枚は燕さんが作ったんだろう。

外面「は」良い、なんて皮肉、彼しか思い浮かばない。

「千種さん。よろしければ、俺が説明致します。まだまだ所長みた
いに上手くはないですが。」

「あ、はい。お願いします。」

所長の説明はあまり上手ではないとは思いますが。という突っ込み
を俺は一生懸命抑え、所長の方から隼さんの方へと向き直った。

「この大蔵株式会社、とは俗に言うヤクザの会社です。」

「……やぐざ。」

「ええ。簡潔に言っしまえばそういうことになりますね。表向きは金貸し、裏では人や宝石、内臓などを売りさばいている典型的なタイプのヤクザですね。」

「あー……なんとなく予想はしてたんですが……ってゆうか典型的なんですか、それ……。」

「それ以外ですと例えば……」「説明しなくていいです！」

俺は確かに裏の世界には懂れているが、そんなヤクザの種類を覚える気はない。

典型的とか、そんなものがこちらにまであると思わなかった。

そして少しわかった。曳船数実^{ひきふねいじ}は、その社員であり、れっきとしたこちら側の人間だったんだ。

「お判りいただけましたか？つまり、彼女は姉妹共にその会社に勤めていました。それにこの名字、見たことがあると思ったら姉の方は有名な方ですよ。」

「有名って、こつちの世界で有名って……。」

「曳船沃実^{ひきふねいじ}、武器の密輸入のお仕事を担当されているらしいですね。貿易リストに、よく載っています。他の方からの信頼も厚いみたいですよ。」

ふと思った。隼さんは何故ここまでヤクザの世界に詳しいのだろう。所長や一里さんも知っている事だったら、まだよかった。だが俺の隣で「へーそうだったんだーすごいね隼！」と目を輝かせている所長を見ると、怖くなってきた。

実はこの人も、結構危ない人なのではないだろうか……。

「だけど、曳船数実は突然会社から姿を消したそうだよ。」

危ない思考になっていた所に、所長の声で現実に引き戻された。

「そしてその時に、人間3人と交換した推定10億円もするエメラルドを持つてつちやっただって。」

「じゅ……!？」

10億円、そんな大金見たことあるわけがない。

0が9個並ぶ、宝くじ一等の3倍……凄すぎる。

その前にでてきた「人間3人と交換した」は俺は聞かなかったことにした。

「ですが、何故彼女はそれを持って逃走したのでしょね。換金してしまえばすぐにバレちゃうようなものを、どうして……。」

「多分、取引相手がいたんじゃないかなあ？それをもっとすごいことに交換してくれるようなさ。それを売って海外にでも逃げようとしたんじゃない？」

「けれど、努力虚しく彼女は殺害されてしまったんですね。」

「うん。でも、まだ宝石は見つかっていないそうだよ。つくくん情報によると、今社員全員が血眼になって探しているんだって。さて、意識が飛んできるところを悪いけど。千種、質問たーいむ！」

「はえ!？」

どうやら俺はまた意識が飛んでいたらしい。またもや所長の声で現実に引き戻された。

ついさっきまで、俺の頭の中ではお金に羽がついて空を飛んでいる図があったのだが。

「その宝石、誰が持っていると思う?」

「へ？だって、彼女は亡くなって、それで……ああ！」

にやり、と所長は笑った。隼さんにもこりと笑っている。

「猫、ですね。」

「そう。どうやら猫ちゃんはまだ見つかっていないみたいだからねー。でもその猫は単なる野良猫なんだよね。曳船数実が逃走中に適当に選んだ猫みたいだし。それに首輪を買って、宝石を上手い事つけたみたい。」

「野良猫って……そんな見つからないんですね。だって、社員の人全員で探していたら、絶対見つかりませんか？」

「だって社員は猫につけてるだなんて知らないんだもの。猫についてるってことを知っているのは、僕ら4人だけさ。」

「……もうひとつ。どうして、曳船数実は、ここに猫探しの依頼をしたんですか？」

「んーこれは勝手な推測だろうけど。」

「僕らの事、殺したいんじゃない？」

捜査 その2

「俺たちのことを、殺す？」

「そ、殺すため。」

所長の口から出てきた言葉はかなり物騒な言葉だった。

先ほどから裏の話だったり、やくざの話だったり、まあずっと物騒な会話は続いていたのだが。

おそらく、今まで会話してきた中で一番危ない言葉だと俺は思う。

「まあ、ここは言ってしまうえば中間なんだよ。」

「中間・・・？」

「表と裏の間。白と黒の間。表の人から受ける仕事が多いから表には好かれていてるけど、裏には僕ら結構な嫌われ者なんだよねー。」

「そうですね。以前も原組に刃物持って追いかけまわされましたものね。」

「まああの時は想定内だったから良かったけどー。彼らの作戦はお粗末だったから。」

「待って、待って下さい。俺についていけない話を始めるのは止めて下さい！」

へらへら笑いながら二人は話しているが、どう聞いてても笑って話すようなことではない。

一応この世界に足を踏み入れたとはいえ、俺はまだ一般人だ。まだそんな刺激は要らない。

「まあそんなわけだよ。曳舟数実は何らかのことがあって、宝石をもつて逃げる事が不可能になった。そこで彼女は咄嗟に近くにいた野良猫に宝石を託した。でも彼女は思った。このまま逃げ回ってい

てもどうせ殺されるだろうと。だったらせめて、一矢報いたいと。そこで彼女は猫探しの依頼を僕ら、A M C 石投事務所に依頼した。おそらくだけど、彼女は彼らに捕まった時、僕らの事務所に行った事を話したんだろうね。そして殺された。残された大蔵のところは、宝石の唯一の手がかりである僕らに話を聞くしかない。けれどあの人たちが僕らのことだいつきらいだからね。話を聞いたらずくに殺するんだろうな。今日の朝の二ニュース見たいのが、明日の朝も流れるんだよきつと。」

俺の頭の中には、今日の朝見た二ニュースのキャスターが「またまた不審死！事務所に4人の死体を発見」といったテロップが入った二ユースを読んでいる姿が浮かんだ。縁起でもない、と頭を強く振った。そうだ、そんな簡単に殺されてたまるか。

「何かアイディア、あるんですよね？」

俺がそういうと、所長はとびつきり嫌な笑みを浮かべて笑った。

「じゃなきゃ面白くないでしょ。僕は殺すのも殺されるのも嫌いなんだ。ましてや4流なんかにね。」

「ですねえ。久しぶりに、面白くなりそうですね。」

「・・・・・・。」

「それに。」

「それに？」

「そろそろあちろさんが仕掛けてくる頃だよ。」

その時だった。

こんこん、とドアのノック音が部屋中に響き渡った。

「どーぞ。鍵なんてかかってないから入りなよ。」

所長がそういったと同時に、きいい、と古臭い音がして扉が開けられた。

俺は内心かなりどきどきしていた。俺の想像では、ここで大量の男が部屋へ押し入り、銃や刃物を突き付けてくるような、そんなことを思っていたのだ。（我ながらドラマの見すぎだと思う）だが、そんな俺の想像は簡単に打ち砕かれた。

入ってきたのは1人の女性だった。

黒のスーツに身を包み、黒のヒール（結構高い）を履かなくても十分高くすらつとしたスタイル。

髪は黒のショートで、顔にはこれまた黒の縁取りの眼鏡。

そしてその顔は、俺たちが先ほどまで話題にしていたあの顔。曳舟数実と似ている顔。

「はじめまして、ね。曳舟沃実よ。よろしくね、石投命さん。」
「よろしくね、沃実ちゃん。」

口調は丁寧だが、俺からみた彼女は、「氷」のようだった。
口元は笑っていても、目は笑っていない。その目は、恐ろしく冷たい目だった。

「けど1人？ボディーガードはよかったの？」
「今日はそんな物騒な話を話しに来たわけじゃないもの。あくまでも、私はお話ししに来ただけなの。よくって？」

「いいよー。まあ座り話もなんだからずっと立っててよね。あ、お茶いる？」

「結構よ。何入れられるかわかったものじゃないから。」

「安心してよーうちに毒はないからー。」

「さあ、どうかしら。」

「あははははははははは。」

「うふふふふふふふふ。」

「……怖い。」

「じゃあ、一つだけ聞いわ。何を知ってる？」

「ド直球だねえ。たまには変化球でもつけばいいのに。」

「私、曲がった事は嫌いな。」

「猫だよ。黒猫。その首にエメラルドが付いてる。まだ僕らも探し出せていない。猫の写真ももらってないからどんなのかわからない。それだけ。ご質問は？」

「無いわ。そう、そうなの。ありがとう。」

くる、と向きを変え、彼女は帰ろうとした時だった。その背中に、所長はもう一度話しかけたのだ。

「妹さんを殺された心境ってのはどうなの？」

曳舟沃実は振り返らずに、言った。

「イモウト、って何かしら。私は一人っ子よ。」

そしてそのまま、静かに扉は閉められた。

*****:

怖かった。お化け屋敷よりも、ジェットコースターよりも、俺の母親よりも。

あの女は、何の感情も持っていない。

妹が殺されても、それはあの人のとって、なんともない事なんだ。

「……さてと。じゃあ、こちらも動こうか。」

所長は立ち上がり、ほかの2人も立ち上がる。慌てて俺も考え事を止め、立ち上がった。

「彼らにはヒントを与えてあげたことだし、僕らも猫を探しに行くよ。僕と千種で猫探し、隼と一里はここで待機。何が起こるかわからないから、事務所を守っててちょうだい。」

「かしこまりました。」

「……………」

「俺が、猫探すんですか？」

正直言つて俺が一番役に立たないと思うのだが…………。

まあ事務所に待機していて敵が来てもやっつけられる自信もないしな…………。

「千種と僕なら大丈夫だよ。さあ、レッツゴーの前に…………着替えてくるから10分待機ね。」

捜査 その3

「さ、いこつか。」

俺の目の前に現れたのは、至って普通の格好をした所長の姿だった。白の半そでパーカーをはおり、中には白黒のボーダーキャミ。黒のショートパンツに黒のオーバーニソックス。そして足元はスニーカー。

「とと、そうだ。一里、髪やってー。」

「……………」

それにさらに一里さんがぼさぼさの所長の髪を綺麗に纏めてくれた。ポニーテールだ。

俺はてつきり執事の格好をした隼さんがやるのだと思っていたが。

（とゆうか、見た目からしてそれっぽいのに）

そういえば前に聞いたことがあった。隼さんはかなり不器用で、一里さんがかなり器用らしい。

そりゃあ、あんなおいしい紅茶淹れてくれるんだもん……。そりゃ器用だよ。

一方俺はというと、簡単なＴシャツとデニム。

さっきまでスーツだったのだが、「それじゃ僕と並んで目立つよ。」

という所長の意見から、隼さんに貸してもらったものだ。

サイズはかなりあっていないが（袖も丈も長すぎる……………）、なんとか調整してとりあえずは着れた。

「あの所長。」

「何だい千種？」

「今度はコート着ていけないんですか？」

「何で暑いのにコート着なきゃいけないの。意味分かんないでしょ。」
「……………」

え、いやでも貴方この間燕さんのところにはコート着て行きましたよね？

まあ前はその質問はスルーされたけどな……。

「よし完了。さ、行くよ千種。準備は良い？」

「あ、はい！」

「お氣をつけて、いつてらっしゃいませ。良い報告をお待ちしております。」

「……………」

そして、俺と所長は事務所を出発した。

「さつき貰ったメールによると、このあたりによく野良猫さんが集まるらしいんだよね。」

「へえ……………」

最初に向かった先は事務所から15分ほど離れた森林公園だった。時間は、まだ3時。学校が終わったのだろう、子供たちが遊具で遊んだりしていた。話によると、餌をくれるおばあさんがいて、大体この時間にここにくるらしい。

そのおばあさんが餌をくれるポイントまで向かうと、情報通りだ。ベンチに腰掛けて、群がっている猫たちに餌をあげているおばあさんの姿があった。

早速近づいて、お目当ての黒猫を探す。だが、黒猫はいなかった。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

「んん？ああ、どうしました？」

「おばあさんて、いつも猫たちに餌をあげているんですよね？その中に、黒い猫っています？」

「黒い猫・・・んー、どうだったかねえ・・・。私は目が遠いから、あまりよくは見れていないけど・・・。でも、いなかったと思うよ、黒い猫なんて。」

「そうですか・・・。」

「・・・ああ、そうだ。ここからすぐに魚屋があるんだけど、そこによく黒い猫がくるって聞いたことがあるよ。」

「！本当ですか！所長！」

「こっちのメールにも入ったよ。善は急げ、行こうか。」

「はい！」

情報を提供してくれたおばあさんにお礼を言って、俺達はその魚屋を目指した。

歩いてる途中、所長の携帯には続々と情報が入ってくるようで、何度も何度も着信音が流れた。

「今回も、燕さんの情報なんですか？」

「ん？んーん、今回は違うよ。つくくんも一応はくれるけど、猫情報じゃないし。」

「じゃあ、誰が・・・？」

「動物と会話できる人。」

「・・・・・・・・・・。」

うん、まあこれまで様々な人がいたから別に不思議ではないんだろうけど……。

動物と会話は、さすがに無理だろう。

「あー信じてないでしょ？嘘じゃないんだよー。ほんとに話せるんだから。」

「はあ……。」

「まあ、近いうちに会うことになるから、その時に紹介してあげる。良い子だよ。」

所長のいう「良い子」に若干の不安を覚えながら、俺達は魚屋へと着いた。

丁度買い物物の時間らしく、辺りには主婦たちがごった返していた。所長は猫を探すため、辺りをうろろし始めた。俺は、魚屋の主人に話を聞くことにした。

「あの、すみません。このあたりで、黒猫みませんでした？」

「いらつしゃ……。黒猫あ？ああ、クロのことか？母ちゃん！今日クロの奴きたかー！！？」

「きてないよー！」

「……。だそうだ。ありや？もう来てもいい時間なんだが……。」「

「そのクロって、首に緑色の石か何かつけてませんか？」

「石？いや、昨日も来たけど、そんなもんつけちゃいなかったぜ。なんだ、あんたクロの飼い主か？」

「あ、いや、違うんですけど……。ちょっと探してて……。ありがとうございました！」

「あいよ！」

その場を後にすると、丁度所長も探すのをやめて戻ってきていた。

「違うみたいです。」

「この辺にもいないよ。ふむー困ったねえ。大体猫って自分のいる場所からそこまで離れないものだけど……。」

「もう大蔵組に捕まってるのか？」

「それはないね。ほら、見てご覧よ。」

所長の指さす先を見ると、そこにいたのは小さな商店街には不釣り合いのスーツに身を包んだガラが悪い男たちの姿だった。

俺と所長は物陰に隠れて観察した。男たちはゴミ箱をあさったり、狭い隙間に体をつっ込んだりと、俺達と似たようなことをしている。つまりだ。

「まだあいつらも探してるんですね。」

「そゆこと。ここにいたら面倒だね。ちよつと離れようか。」

結局俺達は何の手がかりもないまま、再び森林公園へと戻ってきた。時間は午後5時半。遊んでいた子供たちの姿も無く、まばらに人がいるくらいだった。

俺と所長はベンチに座り込み、一旦休憩することにした。

「むむー……メール来ない。てことは手間取ってるんだなあ……」

「これからどうしましょう？またこの辺り探してみます？」

「いや、今からはちよつと危ないかも。人氣が少なくなつてくると大蔵組はもつと人数増やして探すだろうからね。見つかると思つて面倒だし、今日はここまでにしようか。」

「そうですか……」

出来れば、あいつらよりも先に探したい。

あの氷のような、曳船沃実と出会つて、思つた。

あの人に渡してはいけない、とすぐに、俺は思つたのだ。

直感なのかよくわからないけれど、けど何か俺の中で「そいつに渡すな」という考えが、浮かんできた。

危険なのは重々わかつてる。けど俺は、まだ探したい気持ちでいっぱいだった。

そんな俺の気持ちを察したのか、所長は俺の頭に手を置いて、撫でた。

「千種の気持ちはありがたいけど、無理はダメ。大体まだこっちにきてそんな経つてないでしょ。まだこんな危険な目には合わせられないよ。」

「所長……」

「だーいじょーぶ。僕らには最高の情報屋がついてるし、隼も一里もいる。味方だつて色々いるんだから。ね？」

年下の少女に頭撫でられている年上の青年。周りから見たら、不思議な光景だろう。

でも俺には、笑つて、優しく頭を撫でてくれるこの人がすごく安心して、頼りになつて、心が落ち着いてた。

「そう、ですね。」

「じゃあ、帰ろうか。……………っ！」

ベンチから立ち上がった途端、所長の顔は笑顔ではなく、険しい顔つきになった。

俺は辺りを見回す。気づけば、誰もいなかった。だが、その静けさが、何やら嫌な予感がした。

「所長……………」

「あら。囲まれちゃってるや。いやー、僕の勘もだいぶにぶくなっちゃったねえ。いやだいやだ。さて……………出ておいでよ。こっちは丸腰で、特に君たちに逆らうつもりもないからさ。」

そう所長が言った途端、辺りの木の陰から、スーツに身を包んだ男たちが何人も現れた。

見覚えがある奴らがいる。さっきまで魚屋の傍にいた奴らだ。8人もいた。俺達は囲まれるように、男たちに追い詰められた。

「大蔵組……………」

「そ。あれー猫探しはいいの？猫捕まえるんじゃないかって僕ら捕まえてどうすんの？」

「沃実サンの命令だかな。」

男たちの間から、全く違う雰囲気を纏った人が出てきた。

「よう、石投サン。おひさー。」

「……………君なのかよ。うっわー、君なんだ、【猫】^{ねこ}」

【猫】、とその人のことを所長はそう呼んだ。

黒のタンクトップに黒のダメージジーンズ。黒のブーツに、腰には真っ赤なスカーフが巻かれていた。

パーマがかかってふわふわとしている黒髪には、所々赤のメッシュが入っており、首には赤の首輪。

顔は美形の部類に入る。目の色は、血のように赤かった。

「なに、お前勘にぶったん？俺っちが近づいてもあんまり気づいてなかったみたいだし。あつはっは、がっかりだにゃん。」

「取ってつけたようににゃんとか言わなくていいよ。気持ち悪いから。全世界の猫に謝ってよ馬鹿！」

「相も変わらずだねえー。さっきまでその少年には笑顔だった癖に、俺っちにたいしては冷たいよね。俺っちは結構お前の事気に入ってるのに。」

「はあー・・・まさか沃実ちゃんがこんなの雇ってたなんて。いつこ計算が狂ったよ。全くもう。」

「え、シカト？シカトですか？まさかのまさかのシカト？それ結構俺っち傷つくよ？」

普通のように会話を繰り返している二人だが、空気はかなり重たい。

【猫】と呼ばれている人物は、話によるとどうやら曳船沃実に雇われた「殺し屋」だった。

俺の中での殺し屋のイメージって某13の人くらいなんだが。実際は結構違った。

だが、感じる。【猫】からは、曳船沃実と同じ空気だ出ていた。じつと観察していると、所長を見ていた【猫】と思わず目が合ってしまった。

「少年は初めましてだよな？俺っち【猫】。唯の流離いの殺し屋さ

つ。今後ともよろしくね。」

「はあ……。」

「ふーん、いいねその反応。石投サンが気に入るだけあるよ。にやははははん。では早速。」

「とりあえず気絶しといてにゃん。」

何が起こったかわからなかった。

唯気がついたときには離れていた【猫】の姿がいつの間にか俺の近くにいて。

首を叩かれたと思った時には、既に地面に崩れていた。

俺の視界に地面と沢山の足が移った。

そして俺は、意識を手放した。

捜査 その4

「ご苦労だったわね、【猫】」

「いえいえこれくらいどつてことにゃいよー。むしろ物足りない感じい？」

「そう。じゃあもう帰っていいわよ。貴方の仕事はこれでお終いだから。」

「はい？え、こんだけ？」

「報酬は貴方のご主人に振り込んでおいたから受け取ってね。じゃあね。」

「いやいやいや、待って下さいって沃実サン。俺っち、石投サン捕まえるだけに呼ばれたの？」

「だったら何だというの？」

「俺っち、一応殺し屋だけど。」

「それが何？言うておくけれど、私には情報屋だろうが殺し屋だろうが何でもいいの。あの子さえ捕まえておけばそれでいいの。何か問題ある？」

「・・・あるっちゃあるけど、ないっちゃないかな。」

「ならさっさと出て行ってくれる？これから大仕事が待っているんだから。」

「へいへーい。んじゃ、またのご利用お待ちしておりますー。」

「二度と頼まないわ。」

「へ？」

「私、猫という物が嫌いだから。」

「僕は猫が好きだけど嫌いなの。」

「それ、矛盾してますよ所長。」

「千種犬派？」

「まあ、そうですね。小さいころ飼ってたし。猫って自由気ままじゃないですか。犬は忠誠心が高いから、すごくなつきやすく可愛いですよね。」

「あーわかる。猫ってさー言うこときやしないよね。あれだ、触るなら猫がいいけど飼うなら犬がいい。」

「しつけしやすいですねー。」

「ちなみに何飼ってたの？」

「柴犬です。茶色の。」

「ほほー今流行りだよね柴犬！可愛いよね毛がふつさりしてて。」

「猫も毛があるじゃないですか。」

「中々撫でさせてくれないけどね。」

「ああ・・・確かに。でも所長にはよく猫寄ってきますよね。」

「僕動物占い猫だからね。だからじゃない？」

「それ理由になるんですか・・・？」

「そうなんだよね、猫に好かれやすいんだよね、僕。何かいろんな猫に。」

「・・・さつきの【猫】さんもですね。」

「やめてよ！あんな猫じゃないよ！猫なら肉球がぷにぷにして、毛がふわふわで、なおかつにゃんにゃん可愛く鳴くんだよ！あれは猫じゃないよ！」

「（すげえ全力で否定している・・・）所長、猫派なんすね。」

「ごく一部を除いてね。ああもう、思い出したらいらいらしてきた。今度会ったらコンタクトずらしてやる！」

「やること小さっ！って、あれコンタクトなんですか？」

「そつだよ？人間があんな赤い目してるわけないじゃない。」

「ああ、言われてみれば確かに……。」

「千種はもーちよつと観察しなきゃだめだね。結構頭いいんだから、落ち着いて考えてごらんよ。」

「そうですね……。じゃあ、落ち着いて考えたので言います。」

「何だい？わくわく。」

「俺達捕まってますよね？」

捜査 その5

そつ、俺たちは今現在捕まっている。

首を叩かれて気を失って（本当にこんなことできるんだな、ドラマとか以外で。）気がついたときには所長と背中合わせに椅子に座っており体はロープで縛られていた。

所長は俺よりも早く目覚めていたらしく、起きて目があつた瞬間「おそよう」と言われてしまった。

最初は俺もあせっていたが、あまりにも落ち着きまくっている所長を見て、なんとか冷静さを取り戻した。

「……だーいせーかーい！ぴーんぽーん！」

「すごく嬉しくない大正解ですね……」

「ふううむ。しかしどこだろうねえこ。僕も寝てたからどこに運ばれたかよくわかんないよ。」

「そうですか……」

俺は辺りを見回してみた。狭くうす暗い部屋で、ドアは頑丈そうなのが一つだけ。窓は無い。物が乱雑に置かれている。

おまけにけっこう埃臭い。よく見ると、倉庫のような部屋だった。

「うーん……地下のようだね。けどそんな深くは無い。B2Fくらいって感じ？」

「え、わかるんですか？」

「声の反響具合だね。だからあれだけお話してたんじゃない。」

あれだけよくわからない話をしていたのは、場所を確認するためだったのか。

ぼーっとしているようで、所長は色々考えていたらしい。すごいな。

「けど、しょちょーし、静かにー。誰か来る。」

俺は黙って耳を澄ました。上の方からかつんかつん、と靴が鳴る音が聞こえた。

色々な音がどんどんこっちに近づいてくる。上から聞こえたということは、やっぱり所長が言った通り。ここは地下だ。

足音が扉の前で止まった。鍵を開ける音が、部屋に響き渡った。

重たい扉が開けられる。そこにいたのは、5人の屈強そうな男たちだった。

「・・・あれ？沃実ちゃんは？」

「曳舟さんはもう猫を捕まえに行っただぜ。」

「！見つけたのか！？」

「ああ、あんた等が呑気に寝ている時になあ。」

午後5時半頃だった。俺たちが捕まったのは、あれからどれだけ経った？

俺は男が付けている腕時計を盗み見る。午後7時13分。既に約2時間が経っていた。

「【猫】はどうしたんだい？姿が見えないけれど。」

「ああ？奴ならとくに報酬もって帰ったよ。全く便利な奴だよな、殺し屋つてのは。金さえ払えば何でも引き受ける。」

「それ君たちにも言える事ですよ。」

「俺等は殺し屋じゃなくてここの組員だからな。金があってもなくても何でもやるんだよ。」

「大して変わらないと思うけどな。それで？僕らはどうなっちゃうわけ？」

「決まってるだろ？」

5人の男たちがそれぞれ懐から何かを取りだした。

・・・まあ、それは、当たり前のもものなわけで。包丁、ナイフ、拳銃、バット、ナックル。

つてバットを懐からどう出した。

「殺すぜ。ああ、お前の方は高く売れそうだからちよっと傷つけるだけにするぜ。男は殺す。」

「だ、男女差別反対！」

「ああ！？黙ってる男！」

「え、男って売れないもんなんすか所長。」

「物好きはいるけど難しいよー。内臓売りさばいた方が売れるよね。」

「おお、女の方はよくわかってんじゃねえか。」

そんな情報は知りたくもなかった。

しかし段々冷静さが無くなってきた。このままいくと俺は確実に殺される。そして俺の内臓は売りつくされる。

ちらりと所長を見ると、目が合った。そのままにこつと笑って、俺の手を握る。

「落ち着きたまえよ千種。そんで安心してよ。」

「いや、この状況でどうやって・・・」

「僕を信じなよ。君の上司であるAMC石投事務所所長の僕、石投命を信じなよ。」

何故だろう、その言葉にはくばくしていた心臓が落ち着きを取り戻した。

自分よりも年下で、小さくて、尚且つ女の子に諭されるとは我なが

ら情けないと思う。

けれど、不思議と恐怖は消えた。

この人なら、所長なら、何とかしてくれると、そう思った。

「ねえ、おじさん達。クイズです。」

「ああ？」

「人はね、今みたいな状況になったりすると急におしゃべりしだすんだ。なんでだと思う？」

「はあ？んなもん知るかよ。」

「答えは三つ。一つは恐怖のあまり。二つは声を反響させて場所を特定する事。それともう一つ。」

「う」と小さな唸り声をあげて拳銃をもっていた男が突然倒れた。後ろには、一つの影。

周りの男たちは咄嗟の事に反応できない。俺も、状況を理解するのに少し時間がかかった。

その人は、拳銃をもっていた男の手から拳銃を奪い取り、それを燕尾服の下にしまった。

ああ、そういうことか。

成程、安心した。所長が今までやっていた事は単なる……。

「助けが来るまで君らをひきつける時間稼ぎなのさ。待ってたよ、隼。」

そう、時間稼ぎ。

見知った燕尾服。整った顔立ち。いつもと同じ隼さんの顔だった。

「御待たせ致しました、我が主。さて、俺の大事な人達を殺そうなんていい度胸ですね。力の加減は、致しませんよ？」

捜査 その6

気を失った男を跨いで、隼さんはこちらへ歩いてきた。

周りの男たちはいきなりのことにしばらく口を開けたままその場に立ち尽くしていた。

隼さんは俺たちの元へ来ると、燕尾服の下に閉まってあったナイフを取り出し、ロープに縛られていた俺たちを解放してくれた。

「遅くなりました。申し訳ございません。」

「いやーそんなことないよ。んふふーありがと！」

「それにしても、隼さんなんでこの場所がわかったんですか？」

「つつくん、いえ、燕さんのおかげですよ。」

「燕さん？」

「ええ。所長の携帯没収されていたでしょう？実は所長の携帯には特殊な機能が付いておりまして、電源が落ちると燕さんの元へ連絡が届くようになってるんです。」

「僕は携帯オフにすることは絶対ないからね。電源が落ちた時は僕に何かがあった時って決まってるんだよ。」

「それで俺たちのところへ知らせてくれたわけです。GPS機能もついてるので、場所もすぐに特定できました。なにはともあれ、無事で何よりです。」

「へー……。」

しかし携帯って電源が落ちると殆ど機能しなくなるんじゃないのか……？

と思ったが、その「特殊な機能」とやらがきつとすごい機能なんだろうな、うん。

俺は自由になった手足を伸ばす。ずっと縛られていたから、伸ばすとすごく気持ちよかった。

「・・・っおい！！てめえなんだ、どっからきやがった！！！！？」

やっと目が覚めた男たちは、一斉に武器をこちらに向けた。

拳銃男は気を失っているが、まだ4人。各々が武器を持っている。
まだ危険なものには変わらない。

「どこからとは？入口は一つしかありませんが。」

「あそこには俺の部下がいた！！あいつらはどうした！！！」

「・・・さあ。ご自分の目で確かめてみてはいかがですか？」

「・・・っ！！！！！」

「さて。所長、千種さん。曳舟沃実は今港にいつてるそうです。」

「港？」

「ええ、ここから車で20分程度の所に。探し物はそこにあるみたいですよ。ここは俺が引き受けますので、そちらへ向かってください。」

「え、でも隼さん・・・！」

「大丈夫ですよ。これくらいは、慣れておりますので。」

慣れている、ってこの状況に慣れとかあるのだろうか。

ただどさっき隼さんは一瞬で拳銃男を倒した。おそらくかなり強いはずだ。

けど、この人数を1人はけっこうきついと思う。

「俺も「千種、行くよ。」

俺も残ります、と言おうとしたら、所長に手をつかまれ、そのまま所長は引っ張って歩き出した。

突然の事に俺は付いていくことしかできなかった。

「でも、」

「大丈夫。隼のこと信じてよ。さっき僕を信じたように、あの子も信じてよ。」

「……………」

不思議だ。この人の言葉は、いつも心が落ち着く。

この人が言っている言葉に、嘘は無い。

「わかり、ました。」

「うん。じゃあ、いつてくるね隼。」

「はい。」

「それと。死んじゃだめだよ。ちゃんと僕のところに帰ってきてね。」

「

「…………ええ、勿論。俺の帰るべき場所は、あそこしかありませんから。…………では、二人を通して下さいますね？」

隼さんがそういうと、男たちはすぐに道をあけた。微かに武器を持っている手が震えている。

恐怖を感じているんだ、隼さんに。

俺にはよくわからないけれど、さっきまで俺たちと話していた隼さんの空気が変わった気がする。

「さ、行くよ千種」

「はい！」

俺と所長は男たちの間を抜けて、上へ目指した。

階段を何度も登ると、倒れた男たちの姿があった。

傍には扉。さっき話していた通り、ここが一つしかない出入り口なんだろう。

開けると、目の前には一台の車。運転席には、一里さんの姿があった。

「一里さん!」

「千種、急ぐよ。車乗って!」

俺たちが車に乗り込むと、一里さんは車を発進させた。

「沃実ちゃんたちはまだ探している最中?」

「……………」

「そっか、わかった。さて、ではいきますか。最終決戦に。」

「…………もうそろそろ港に到着するころですね。」

命と千種がここを出てから既に15分が経っていた。隼は持っていた懐中時計を懐に閉まう。

「では、俺ももう少ししたら向かうとしますか。ねえ。」

足元には男たちが転がっていた。さらに包丁は折れ、ナイフは曲がり、バットは碎かれ、ナックルは粉々だった。

3人が息をしない中でただ一人、リーダー格の男だけは苦しそうに息をしていた。

「・・・お、まえは・・・いたい・・・!？」

「・・・唯の執事で、唯の副所長ですよ。少しでも腕っ節の強い、ね。さてと、貴方から聞き出せる事は全て聞き出せましたし、ここらで死んでおきましょうか？」

「!ま、て・・・!」

「俺はね、普段はあまりここまでしないですよ。」

「・・・?」

「けれど、お前らは俺に対して一番やってはいけない事をした。俺はそれが許せない。そんな奴ら生きる価値もない。」

男はいきなりの隼の変貌に驚いた。先ほどまでとは違う、恐怖が増している。

「だから、死ねよ。」

男は死ぬ間際見たのは、

「では、向かいますか。ああ、所長に携帯を渡すのを忘れてた。」

「まあいいか、すぐに会えるし」と呟き隼は外へ出て、タクシーを拾った。行き先を告げると、タクシーは動き出した。

倉庫には、14人の死体だけが残っていた。

対決 その1

20分程して、港に着いた。俺達は近くの倉庫の影に車を止め、降りた。

辺りはすっかり暗闇に満ちていた。普段は船の音や仕事をしている人でにぎわっている港も、この時間帯は恐ろしく静かだった。所長が歩きだしたと同時に、俺と一里さんもその後を追った。

「さてさて。どこにいるかなあ沃実ちゃん。呼んだら返事してくれると思う?」

「まあ、すると思いますけど……。いや、やらないでくださいよ?」

「うはは。千種も突っ込みがうまくなったね……。と。」

所長が急に動きを止めた。俺達も同じように止まる。近くにあったコンテナに隠れ、そこから顔だけを覗かせた。

視線の先には、曳船沃実と、その他数人がうつろっていた。数人の男たちが手に網を持っていたり、動物を運ぶケースを持っていた。

「まだ見つかってないみたいだね。んふふ、大チャンス。」

「あれだけ時間があったのに、まだ見つからないってことはもうここにはいないんじゃない?」

「それはないね。でしょ、一里。」

所長が問うと一里さんは首を縦に振った。

俺達はもう少し距離を詰めて、曳船沃実達の傍まで近づくことにした。

「……まだ見つからないわけ？」

「も、申し訳ございません！只今A班、B班と共に全力で探しております！」

「貴方達の全力はこの程度なの？大したことないのね。あと5分で見つけなさい。でなければ、私から直接社長に貴方達の事をお伝えするから。」

「……っ！？わ、わかってます！」

「……それと、あそこにいるC班からの連絡は？」

「まだありません。何かあった時は連絡が入るようになっておりますので、特に不測の事態にはなっていないようです。」

「そう。まあ、あの子があそこにいるのならいいわ。」

そのあの子は今まさにあんだ達の傍にいます、なんて突っ込みを声に出して言うほど俺は馬鹿じゃない。

しかし会話を聞いていると、曳船沃実是相当すごい立場の人間らしい。

あんなおっさんたちが冷や汗かいて必死に探しているんだもんな。少し同情する。

「さて、このままここいても埒が明かないし、いきますか。」

「ど、どうやってですか？作戦とかあるんですか？」

「作戦？あるよー。その名も『強行突破』！簡単でしょ？」

「すいません俺帰りたいです。」

「ここまできて帰れる訳ないじゃん。ほらいくよくよ！」

「沃実ちゃん！さっきぶりー！」

所長が大声で叫ぶと、その場の全員がこちらに視線を向けた。中でも曳船沃実は今まで顔色一つ変えなかったその顔が、盛大に驚

いていたのが見えた。

「！な、ぜ！？」

「僕らがあんなところに閉じ込められてはいおわりーな訳ないじゃない。」

「っC班から連絡はなかったんでしょ！？」

「は、はい！何か不測の事態があれば監視カメラを通して我々の処に連絡が・・・！」

「監視カメラなんてどっかの誰かさんにかかればすぐにいじれるよ。残念だったね。」

「【燕】か・・・！っA、B班両方来なさい！作戦を変更、こいつらを始末なさい！」

その呼びかけに今まで猫を探していた連中が俺達を取り囲んだ。ぐるっと見渡す限り、20人はいる。

全員が手に武器を持っている。さっきの奴らとは違い、ほとんどが拳銃だった。

前門の虎、後門の狼とはまさにこのことだな。

「さあ、これで逃げ場はないわ。いくら貴方でも、この数相手に戦える訳がない。チェックメイトよ。」

「・・・僕チェス嫌いなんだよね、難しいから。それに、言ったよね沃実ちゃん。『あの子がここにいないければいい』って。」

「・・・それが何？」

「そこまで僕を警戒しているなら、この状況で安心しちゃいけないよ。」

がん、と何かが壊れる音がした。

後ろを振り向くと、拳銃を持っていた男の手に、拳銃が握られていなかった。

足元には、おそらくその拳銃だったものであろう部品が、見るも無残な姿になって落ちていた。

「え・・・？」

驚いている間もなかった。次々と、拳銃を持っている男たちの手から、その拳銃は破壊されていった。気がつけば、あっという間に半数以上が丸腰になっていた。

「これは・・・！？」

「沃実ちゃん達は地上ばっか警戒してるからダメなんだよ。空だつて、警戒しなきゃあ、ね？」

「・・・まさか！！！」

「おや。これはナイスタイミング、とでもいうべきですかね。」

聞き覚えのある声に振り向く。

そこには、既に丸腰の男たちを倒した隼さんの姿があった。

「隼さん！」

「只今戻りました。と、ついでに8名程気絶させておきました。」

「んふふ、ごくろーさま。さてと、沃実ちゃん」

「今度は僕らの反撃だよ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3876t/>

AMC石投事務所

2011年11月9日16時14分発行